

群 教 ゼ	G02 - 02
	平15.211集

社会的事象の意味について深く考える 子供を育てる社会科指導の工夫

- 子供たちが交流し合う活動を通して -

長期研修員 竹田 元

長期研修員 山田 浩昭

《研究の概要》

本研究は、子供たちが交流し合う活動を通して、社会的事象の意味について深く考える子供を育てようとしたものである。具体的には、問題解決的な学習の各過程に「気付きや疑問、話し合いの結果などを発表し合う」「出された考えなどに対し意見を交換し合う」「問題解決の方法などを話し合う」「調べて分かった事実を教え合う」などの交流し合う活動を意図的に組み入れ、子供たちの変容を図った。

【キーワード：社会 小 社会的思考力・判断力 交流 問題解決的な学習 学習過程】

主題設定の理由

今後も激しい変化が予想される現代の社会において、子供たちは様々な課題に出会い、それらを自分なりに解決しながら生きていかなければならない。国際社会に生きる日本人の育成という観点からも、社会の変化に自ら対応し、豊かな心をもち主体的・創造的に生きることができる資質や能力を育成することが求められている。こうした社会の求めに応じ、これからの社会科教育においては、問題解決的な学習や体験的な学習、学び方や調べ方を身に付ける学習を一層重視していく必要がある。新学習指導要領の導入によって学習の対象・事例の選択幅が広がり、これまで以上に地域に密着した社会科の学習を展開できるようになったこともあり、これらの学習を取り入れた子供たち主体の社会科授業を行いやすくなってきている。

子供たちは、地域に密着した教材や体験的な学習に対する興味・関心が高く、問題解決的な学習では意欲的な取組が見られることが多い。しかし、興味・関心の高さが理解・態度・能力の統一的な育成のために十分生かされておらず、問題解決的な学習においても、学習問題の設定や、資料の効果的な活用、社会的事象に対する意味付けなどで問題点が見られる。これらの学習を行っていくためには、社会的な思考力や判断力が大変重要になる。しかし、社会的事象の意味について考える活動が意図的に組み入れられていない実践が多く、子供たちの思考力・判断力が十分育成されていないのが現状である。このような実態は、教育課程実施状況調査の結果にも表れており、国・県ともに「社会的な思考・判断」の通過率が設定通過率を下回っている。

社会的事象の意味について考える活動を有意義なものにするためには、子供たちが調べて分かったことや考えたことをそのまま終わらせず、それらを交流し合うための場や時間を設定する必要がある。なぜならば、交流によって多様な見方や考え方にふれ、それらを基に自分の考えを確かめたり修正したりしながら、広い視野に立って社会的事象の意味について考えていけると思われるからである。その方法としては、問題解決的な学習の各過程に、話し合いや教え合いなどの子供たちが交流し合う活動を意図的に組み入れることが有効ではないかと考える。

以上のように、本研究では、問題解決的な学習の各過程に子供たちが交流し合う活動を取り

入れれば、社会的事象の意味について深く考える子供を育てることが可能であると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

社会的事象の意味について深く考える子供を育てるために、問題解決的な学習の各過程に、子供たちが交流し合う活動を取り入れることが効果的であるか、実践を通して明らかにする。

研究の見通し

問題解決的な学習の各過程に、子供たちが交流し合う活動を取り入れれば、子供たちは社会的事象の意味について深く考えていくことができるであろう。

- 1 つかむ過程において、自分の気付きや疑問を発表し合ったり、追究の方向性について話し合ったりする活動を取り入れれば、子供たちは気付きや疑問を問題へと高め、問題をより確かに把握することができるであろう。
- 2 調べる過程において、同じ問題を追究する仲間同士で、問題を解決する方法について話し合ったり、調べて分かった事実を教え合ったりする活動を取り入れれば、子供たちは見通しをもって問題を追究し、事実を正確に把握することができるであろう。
- 3 深める過程において、異なった問題を追究する仲間同士で、互いが調べて分かった事実を教え合う活動を取り入れれば、子供たちは分かった事実を比較・関連・総合させて考え、社会的事象に対して自分なりの意味付けをすることができるであろう。
- 4 広げる過程において、これまでの学習で身に付いた社会的事象に対する見方や考え方をもち、新たな問題の解決策について、少人数で話し合ったり、全体で意見を交換し合ったりする活動を取り入れれば、子供たちは社会的事象のもつ多面性に気付き、社会的事象の意味をより広い視野から考えることができるであろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 社会的事象の意味について深く考える子供とは

社会的事象とは子供たちが観察、調査したり見学したりすることによって、事実として具体的に知ることができる社会的な事柄や出来事であり、子供たちの学習の対象となるもののことである。そして、社会的事象を調べたり、それを基に考えたりすることによってとらえられる、社会や人々と社会的事象とのかかわりを、社会的事象の意味ととらえた。

社会的事象の意味について深く考えるとは、社会的事象に対し、問題意識をもってかかわりながら事実を正確に把握し、それを基に多様な観点から考察して自分なりの見方や考え方をつくることである。社会的事象を多様な観点からとらえることによって、事象を総合的に見たり、広い視野からとらえたりできるようになり、子供たちに確かな見方や考え方が育っていくと考えられる。

本研究における社会的事象の意味について深く考える子供とは、問題意識をもって具体的に

観察・調査したり、地図や統計などの各種の資料をたねんに読み取ったりして事実を正確にとらえ、それらを比較したり関連付けたり総合して考えたりするなどして、社会的事象に対して自分なりの意味付けをし、さらに社会的事象を相手の立場や自分の生活などのかかわりからとらえることができる子供である。

(2) 子供たちが交流し合う活動とは

交流活動には、外部講師との交流や他校の子供たちとの交流などもあるが、本研究の交流は学級内の子供たち同士で行うものである。

子供たちが交流し合う活動とは、気づきや疑問、結果などを発表し合ったり、出された考えに対し意見を交換し合ったり、問題解決の方法を話し合ったり、調べて分かった事実を教え合ったりすることを通して子供たちが学び合う活動である。社会的事象の意味について深く考える子供を育てるために、問題解決的な学習の各過程に、子供たちが交流し合う活動を次のように設定していくことにした。

つかむ過程では、問題をより確かに把握するために、社会的事象に出会うことによって生まれた気づきや疑問を発表し合ったり、追究の方向性について話し合ったりする活動を取り入れる。具体的には、まず、子供たち一人一人が社会的事象との出会いから気づきや疑問をもつ。次に、それらをグループ内で発表し合い、「似ているものはまとめる」「社会科の学習問題として適切でないものや、解決の必要性がないものは除く」などの観点を基に話し合うことによって問題へと焦点化していく。そして、その結果を発表し合い、全体で話し合うことによって学習問題を設定する。これらの活動を通して子供たち一人一人が問題をより確かに把握できるようにする。

調べる過程では、問題解決に向けて事実を正確に把握するために、同じ共通問題（単元を通して追究していく大きな学習問題）を設定した仲間同士で調査グループを作り、問題追究の方向性について話し合ったり、調べて分かった事実を教え合ったりする活動を取り入れる。具体的には、まず、自分たちの調査グループの共通問題を解決するために、どのようなことを調べていけばよいのか話し合う。次に、各調査グループが調べようとしていることを発表し合い、自分たちの調査グループの問題追究の方向性に誤りがないかどうかを確かめる。実際の調べ活動では、資料の読み取りなどを各自で進めるが、分からない点については各調査グループ内で協力しながら進める。そして、調べて分かった事実を各調査グループ内で教え合い、互いに調べて分かった事実を共有化する。これらの活動を通して、子供たち一人一人が追究している問題について事実を正確に把握できるようにする。

深める過程では、社会的事象について分かった事実の比較・関連・総合を行い、社会的事象に対して自分なりの意味付けをするために、異なった問題を追究する者同士のグループ（発表グループ）に組み替え、調べて分かった事実を教え合う活動を取り入れる。具体的には、各調査グループのメンバーが入り交じった発表グループに分かれ、各調査グループで調べてきたこ

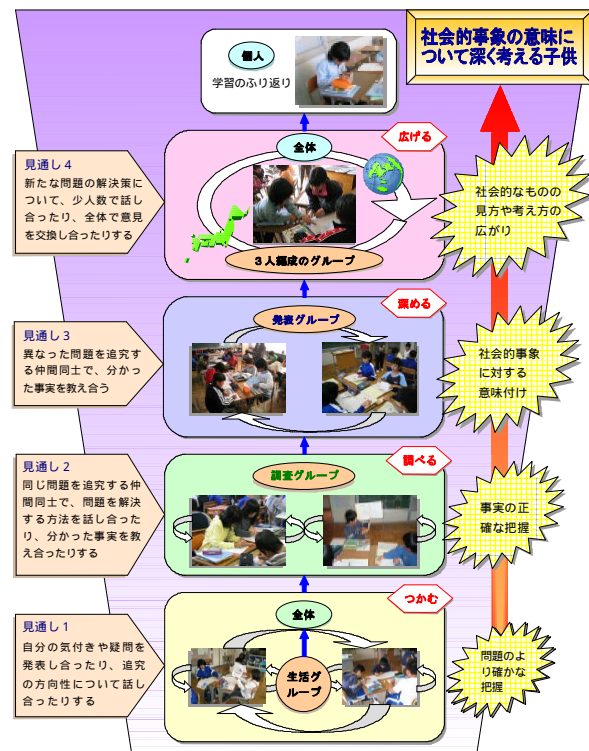


図1 研究の基本構想図

とやそこから考えたことを教え合い、互いに調べて分かった事実を共有化する。こうして分かった事実を比較・関連・総合させて考える。これらの活動を通して、子供たち一人一人が追究している社会的事象について事実を正確に把握し、自分なりの意味付けができるようにする。

広げる過程では、社会的なものの見方や考え方を広げるために、これまでの学習で身に付いた社会的事象に対する見方や考え方を基に、新たな問題の解決策について少人数で話し合ったり、全体で意見を交換し合ったりする活動を取り入れる。具体的には、まず、考えた解決策の有効性について、実現の可能性、生活への影響などの観点を基に少人数のグループで話し合う。次に、グループの結論を発表し合い、全体で意見を交換し合う。そして、出された意見を参考にしながら自分の考えをまとめる。これらの活動を通して、子供たち一人一人が社会的な事象のもつ多面性に気付き、社会的事象の意味をより広い視野から考えることができるようにする。

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で授業実践を行い検証する。

(1) 授業実践計画

地域や児童数などの環境が異なっても有効であるかどうかを検証するために、二つの学校で同じ授業実践を行い、その結果を総合させて検証する。

教科	社会科		
対象及び 授業者	伊勢崎市立豊受小学校5年1組 30名	30名	長期研修員 竹田 元
	六合村立第一小学校5年 10名	10名	長期研修員 山田 浩昭
単元	2 わたしたちの生活と工業生産 3 工業生産をささえる貿易と運輸		
期間	平成15年10月中旬～11月中旬 (7時間)		

(2) 抽出児童

第一小 豊受小	A	社会科の学習では、自分で学習問題を設定し意欲的に追究できることが多い。アイデアが豊かで、自分の考えをはっきり主張できる。しかし、自分の考えだけで進めていったり、興味・関心を優先させて当初の目的からそれていったりして、考えが深まらないまま終わってしまうこともある。仲間との交流の中で様々な考えにふれさせることによって自分の考えを見直し、社会的事象を広い視野からとらえられるようにしていきたい。
	B	社会科の学習にまじめに取り組んでおり、自分の考えは全員の前でも発表できる。一人による調べ学習を好むが、グループ学習のよさにも気付いており、協力して学習を進めることができる。しかし、学習内容に対する興味・関心が余り高くなく、社会的事象の意味について考える力も十分身に付いていない。仲間との交流を通して得られた情報を基に、比較や関連などの観点を与えて考えさせることにより、社会的事象の意味をとらえさせていきたい。
	C	社会科の学習に対して興味をもって取り組んでいることが多い。学習問題を意欲的に追究し理解力もあるが、資料を活用する力が十分でないため事実を正確に把握していなかったり、社会的事象を一面的にとらえることで満足し十分考えを深めようとしなかったりすることがある。仲間との交流の中で、新しく得られた情報から事実を正確に把握したり、多様な友達の考えを取り入れながら自分の考えを深めたりできるようにしたい。
	D	社会科の学習にまじめに取り組む、グループ学習を好むが一人でもしっかりと学習を進めることができる。資料を活用したり調べたことから考えたりする力があって自分なりの考えをもつことができるが、自信がなく人の考えによって自分の考えを変えてしまうこともある。仲間との交流で多様な考えにふれることによって、自分の考えに自信をもち、新しい発見からさらに自分の考えを深めることができるようにしたい。

(3) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	つかむ過程において、貿易や運輸の働きについて、一人一人の気付きや疑問を発表し合い、グループや全体で解決の必要性などについて話し合っ問題をも焦点化していく活動を取り入れたことは、追究すべき問題をより確かに把握するのに有効であったか。	・観察 ・事後調査 ・ワークシート(交流する前後での問題把握の状況を比較)
見通し2	調べる過程において、輸出や輸入に関する問題を解決する方法について話し合ったり、調べて分かった事実を教え合ったりする活動を取り入れたことは、自分が追究していた「輸出」あるいは「輸入」について、事実を正確に把握するのに有効であったか。	・観察 ・事後調査 ・ワークシート(調べて認識した事実とそこから導き出した考え)
見通し3	深める過程において、「輸出」あるいは「輸入」について調べて分かった事実やそこから考えたことを教え合う活動を取り入れたこと	・観察 ・事後調査 ・ワークシート(交流す

	は、分かった事実を比較・関連・総合させて、工業生産を支える貿易について自分なりの意味付けをするのに有効であったか。	る前後での社会的事象に対する意味付けの変化)
見通し 4	広げる過程において、つりあいのとれた貿易にするための方法を検討するために小グループで話し合い、その結果について全体で意見を交換し合う活動を取り入れたことは、貿易のもつ多面性に気が付き、これからの貿易と運輸の姿について、自分の生活と関連付けたり、貿易相手国の立場に立ったりして、より広い視野から考えるのに有効であったか。	・観察 ・事後調査 ・ワークシート（交流する前後での社会的事象に対する見方・考え方の広がり）

研究の展開

1 小単元名 「3 工業生産を支える貿易と運輸」(学習指導要領第5学年 内容(2)のウ)

2 小単元の考察

大単元「2 わたしたちの生活と工業生産」は三つの小単元で構成されており、本小単元は其中で最後に取り扱うものである。子供たちは、前小単元までに我が国の農業や水産業、工業の現状や特色を概観し、それらと関連させて農・水産物や自動車部品などの輸送の様子についてもふれてきている。本小単元ではさらに視野を広げて、世界とのかかわりの中で工業生産を支える貿易や運輸の様子をとらえ、我が国の産業の様子や、産業と国民生活との関連を総合的に理解していく。時間とともに大きく変化していく本小単元のような事象を扱う場合、調べたことをそのまま覚えただけでは、ほとんどが応用のきかない知識のままで終わってしまうであろう。重要なのは「調べたことから考える力」、つまり、将来様々な課題に直面したときに生きて働く力をつけることであり、本研究が目指す子供像と合致する。

本小単元は、学習内容が国内の運輸と貿易（輸出・輸入）に分かれており、最後にそれらを総合して工業生産とのかかわりを考えるようになっている。したがって、学習問題を分担して調査を行い、分かった事実や考えなどを交流し合っ社会的事象の意味について考える学習を設定するのに適しているといえる。このような学習を通して、子供たちは、我が国の工業生産を支える貿易や運輸の働きについて事実を正確に把握し、その意味をより広い視野から考えることができるため、本研究の対象として適した小単元であると考えられる。

3 小単元の目標と評価規準

(1) 小単元の目標

工業生産を支える貿易や運輸の働きを調べ、我が国の工業生産において貿易や運輸が重要な役割を果たしていることを考える。

(2) 小単元の評価規準

【小単元の評価規準を導き出すために参考とした内容のまとめりの評価規準】

「我が国の工業生産」の評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	観察・資料活用の技能・表現	社会的事象についての知識・理解
我が国の工業生産の様子に関心をもち、それを意欲的に調べることを通して、国民生活を支える我が国の工業生産の発展について関心を深める。	我が国の工業生産の様子から学習の問題を見いだして追究・解決し、国民生活を支える我が国の工業生産の意味を考え、適切に判断する。	我が国の工業生産の様子を的確に調査したり、地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用したりするとともに、調べた過程や結果を目的に応じた方法で表現する。	我が国の工業生産は国民生活を支える重要な役割を果たしていることを理解している。

【小単元の評価規準及び学習活動における具体的評価規準】

ア 社会的事象への関心・意欲・態度	イ 社会的な思考・判断	ウ 観察・資料活用の技能・表現	エ 社会的事象についての知識・理解
工業生産を支える貿易や運輸	我が国の貿易や運輸の様子について、学	工業生産を支える貿易や運輸の	工業生産を支える貿易や運輸

評小 単元 規元 準の	輸の様子に関心をもち、意欲的に調べることを通して、これからの貿易と運輸の発展を願おうとする。	習の見通しをもって追究し、調べたことを基に、貿易や運輸が工業生産を支える重要な役割を果たしていることを考え、適切に判断している。	働きを、地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を活用して具体的に調べ、結果を目的に応じた方法で表現している。	輸の働きを理解している。
学 具 習 活 動 評 価 お 規 け 準 る	貿易や運輸の様子に関心をもち、運輸や輸出・輸入の具体的な内容について進んで調べようとする。 これからの貿易と運輸で大切なことについて進んで考え、その発展を願おうとする。	工業生産を支える貿易や運輸の様子について問題意識をもち、学習の見通しをもって追究・解決している。 調べたことを基に、貿易や運輸が我が国の工業生産において重要な役割を果たしていることや、これからの貿易と運輸の在り方について考え、適切に判断している。	貿易や運輸の様子を、写真や地図、グラフなどの資料を活用して具体的に調べている。 収集した情報を整理してまとめ、結果を分かりやすく表現している。	原材料の確保や製品の販売などにおいて、運輸の働きが深いかかわりをもっていることが分かる。 原材料の確保や製品の販売などにおいて、貿易が深いかかわりをもっていることが分かる。

4 指導と評価の計画

学習 過程	時間	主な学習活動 (は学習のねらい)	学習 形態	学習活動への支援	評価 規準	評価項目
つ か む	1	↑ 見 通 し ↓	生活グループ	話し合いがスムーズなように、気付きや疑問は付せん紙に書かせ、それを台紙の上で動かしながら整理できるようにする。 話し合いでは、学習のねらいに沿った観点をもとに、共通しているものをまとめたり、追究する必要のないものを除くよう助言する。 追究する価値があるが、子供からは出なかった問題については、発問等を工夫してできるだけ気付けるようにする。 気付きや疑問を「輸出」「輸入」「運輸」に分けて整理し、それぞれについて学習のねらいに迫れるように問題を焦点化していく。 学習の流れを理解できるように、図を使って説明する。	ア イ	貿易や運輸の様子に関心をもち、進んで調べようとしているかどうかを、ワークシートやグループの話し合いの様子などの分析を通して評価する。 工業生産を支える貿易や運輸の様子について解決すべき問題を設定し、学習の見通しをもたかどうかを、ワークシートや発表した内容の分析を通して評価する。
				生活グループ	グラフを読み取る方法を復習しながら、輸送量の割合の変化を読み取れるようにする。 自動車、鉄道、船、飛行機など、輸送方法ごとの特色をまとめた資料を提示する。 米、水産物、自動車部品の輸送など、具体的な事例を基に考えていくことによって、運輸と工業生産とのかわりに気付けるようにする。 調べて分かった事実だけでなく、必ずそれに対する自分の考えを書けるようにする。	ウ イ エ
調 べ る	1	↑ 見 通 し ↓	生活グループ	「輸出」あるいは「輸入」について、各種の資料を活用し、自分が設定した問題を解決する活動を通して、調べたことから考えることができる。 1 調査グループで話し合い、追究していく学習問題を選ぶ。 2 各調査グループが選んだ学習問題を発表し合い、問題追究の方向性に間違いがないかどうか確かめる。 3 調査グループで話し合って学習問題を決定する。 4 資料の読み取りを通して、各自の学習問題を解決する。 5 自分が調べて分かったことについて、自分なりの意味付けを行う。	ア ウ イ	貿易の様子に関心をもち、自分が調べる輸出・輸入の具体的な内容について進んで調べようとしているかどうかをグループの話し合いの様子やワークシートの分析を通して評価する。 輸出や輸入などの貿易の様子を、資料を活用して具体的に調べているかどうかを、グループの話し合いの様子やワークシートの分析を通して評価する。 工業生産を支える貿易の様子について問題意識をもち、学習の見通しをもって追究・解決しているかどうかを、グループの話し合いの様子やワークシートの分析を通して評価する。
				生活グループ	一人一人が責任をもって調べられるように、また交流時に余計な緊張感などをたずずに済むように、3、4人程度の少人数の調査グループを組む。 グループ同士での交流を設定し、「輸出」または「輸入」について、各調査グループがどんな点を追究しようとしているのか発表し合うことによって、自分たちの調査グループの問題追究の方向性に誤りがないかどうかを確かめられるようにする。 資料を効果的に収集・活用できるように、資料の探し方や具体的な調べ方、読み取り方などを載せた手引を用意しておく。 次時の発表に向け、分かったことを整理して発表用の資料にまとめられるようにする。	ウ イ

深める	1	見通し3	自分なりの意味付けを行う。 一人一人が調べたことを教え合うこと によって貿易に関する共通問題を 解決し、「工業生産を支える貿易の役 割」について自分なりの考えをもつ ことができる。 1発表グループに分かれて各調査グル ープの調査結果を教え合い、互いに 調べて分かった事実を共有化したり、 自分の考えを深めたりする。 2輸出と輸入について、新しく分かっ た事実やこれまでに調べて分かって いた事実のつながりを考えて、自分 なりの意味付けを行う。 3ふり返しシートを使ってこれまでの 学習をふり返し、自己評価をする。	発表グ ループ 一斉	一人一人が責任をもって発表できるように、 また余計な緊張感をもたず教え合いが行われ るように、4人程度の少人数の発表グルー プに組み替える。発表グループは、一人一人が 調べた内容が重複しないように、教師側で意 図的に編成する。 分かった事実を比較・関連・総合などの観点 から考えることによって、貿易に対し自分 なりの意味付けができるようになる。 自己評価を次時のコース別学習に生かせるよ うに、ふり返しシートでは、理解しておくべ き事実が分かっているか、調べて分かったこ とから自分の考えが書けたかなどについて確 認できるようにする。コース分けは、子供た ちの希望を生かしながら相談して決定する。	イ エ	調べたことや発表を聞いて分かったこ とを基に、貿易が我が国の工業生産に おいて重要な役割を果たしていること について考え、適切に判断しているか どうかを、グループでの発表の様子や ワークシートの分析を通して評価する。 原材料の確保や製品の販売などにおい て、貿易が深いかわりをもっている ことが分かったかどうかを、ワークシ ートや自己評価のためのふり返しシ ートの分析を通して評価する。
			学習をふり返し、輸出と輸入のつり あいの取れた貿易にするための方法 について考えることができる。	これまでの学習の補充を行うとともに、これ からの貿易と運輸について自分なりの考えが もてるように、コース別の少人数指導を行う。			
			発展コース 1 これまでにふれ てこなかった学 習内容について、 資料の読み取り などを通して確 認する。 2 貿易のよさと問 題点について、 資料の読み取り を通して考える。 3 つりあいの取れ た貿易にするた めの方法につい て、自分なりの 考えをもつ。	補充コース 1 これまでにふ れてこなかっ た学習内容に ついて、資料 の読み取りな どを通して確 認する。 2 資料の読み取 りを通して、 貿易のよさと 問題点を知る。 3 つりあいの取 れた貿易にす るための方法 について、自 分なりの考え をもつ。	コース 別一斉	発展コース 子供たち主体の学習 の中でふれられな かった部分を抽出し、 大切なことをもれな く扱えるようにする。 日本の主な貿易相手 国について調べたり 自分から貿易のよさ や問題点に気付いた りできるようにする。 次時の話し合い活動 を活発なものにするた め、できるだけたく さんの方法を考える ように働きかける。 補充コース 分かりやすい資料 を提示し、社会的 事象のもつ事実を 正確に把握できる ようにする。 なるべく分かりや すい資料を用意し、 資料の読み取り方 も確認しながら調 べるようにする。 何が問題になっ ているのかをはっき りさせることによ り、その解決策を 具体的に考えられ るようにする。	ウ イ
広げる	1	見通し4	つりあいの取れた貿易にするための 方法について話し合う活動を通して、 これからの貿易と運輸で大切なこと は何かについて考えることができる。 1つりあいの取れた貿易にするための 方法について、3人編成の小グルー プで話し合う。 2各グループが選択した方法を発表し 合い、全体で意見を交換し合う。 3 これからの貿易と運輸について、自 分なりの考えをまとめる。	グル ープ (重受 はコ ース別 一斉)	一人一人が積極的に話し合いに参加できるよ う、最初に3人編成の小グループによる話し 合いを行う。豊受小学校では、3人によるグル ープ編成を可能にし、結果の発表と全体での意 見交換を効率よく行うために、第6時に引き 続きコース別で学習を行う。 解決策を付せん紙に書いたものをワークシ ート上で動かしながら、一つ一つの方法的有 効性を検討するという手法を取り入れること によって、話し合いへの参加を容易にし、活 発な意見交換が行われるようにする。	ア イ	これからの貿易と運輸で大切なこと について、進んで考えていこうとして いるかどうかを、話し合いの様子やワー クシートの分析を通して評価する。 これまでに学習したことを基に、貿易 や運輸が我が国の工業生産において重 要な役割を果たしていることやこれか らの貿易と運輸の在り方について考え 適切に判断しているかどうかを、話し 合いの様子やワークシートの分析を通 して評価する。

研究の結果と考察

1 つかむ過程において、貿易や運輸の働きについて、一人一人の気付きや疑問を発表し合い、グループや全体で解決の必要性などについて話し合って問題を焦点化していく活動を取り入れたことは、追究すべき問題をより確かに把握するのに有効であったか

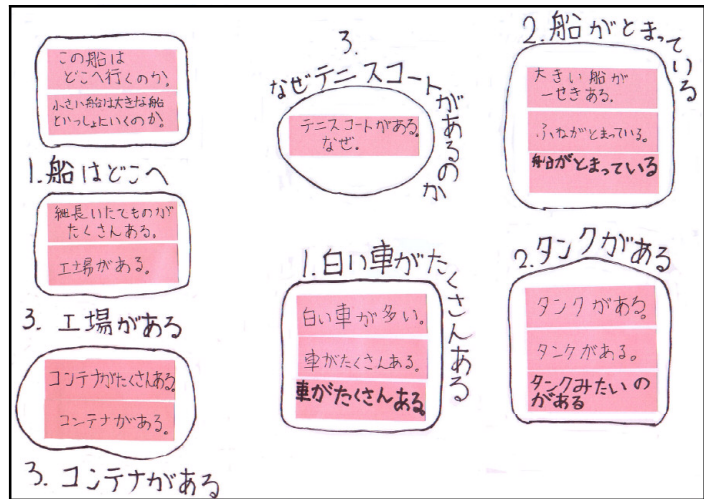
第1時は、気付きや疑問を問題へと高め、問題把握を確かなものにしていくために子供たちが交流し合う活動を行った。はじめに、横浜港の写真資料を見て気付いたことや疑問に思ったことを一人一人が付せん紙に書いた。次に、それらを生活グループの中で発表し合い、「似ているものはまとめる」「今回の学習と関係ないものや解決の必要がないものは除く」などの観点から話し合って整理し、問題を焦点化していった。最後に、各生活グループの結果を基に話し合って共通問題を設定した。

【六合村立第一小学校】(生活グループは、3人×3グループ)

Aさんは、六つの気付きを付せん紙に書いた。生活グループの中で発表し合う場面では、最初に「テニスコートがある。」と発表した。ほかの子供から「今回の学習とは関係ない。」という意見が出された。気付きや疑問をまとめて、話し合いの観点から見て大切だと思われる順

にランキングをしていく場面では、テニスコートに対するこだわりを見せながらも、はじめに「なぜテニスコートがあるのか」を一番下にランク付けして、ほかの気付きや疑問を上位にもっていきように配慮していた。話合いの結果、「白い車がたくさんある」「船はどこへ」が重要なこととして1位にランクされた(資料1)。そして所属する生活グループの代表として結果を発表し、テニスコートのことも最後に付け加えた。それに対し、ほかのグループの子供からも「関係ないと思う。」という意見が出された。共通問題を設定する場面ではテニスコートへのこだわりもなくなり、「工業生産を支える貿易と運輸のはたらき」という共通問題の候補を考え出すことができた。生活グループや全体で話し合って学習問題を設定していったことによって、自分の思い込みや興味・関心を優先させず、大切な気付きや疑問はどれなのかについて周りの意見を徐々に取り入れながら考え、判断することができたと考えられる。

資料1 付せん紙による焦点化



Bさんは、写真資料を見て幾つか気付いたことがあるようだったが、自信がなく、付せん紙に書けたのは「車がたくさんある」だけだった。生活グループの中で発表し合う場面では、書いた気付きを発表し終わると、しばらくの間話合いに参加できなかった。だが、ほかの子供の発表を聞いてどんなことを書けばいいのかが分かり、途中で「大きい船が一隻ある」と書いて発表した。気付きや疑問をまとめ、話合いの観点から見て大切だと思われる順にランキングをしていく場面では、Bさんの気付きでもある車と船のことが1位と2位にランクされた。そして所属する生活グループの代表として、自分が考えたものではない疑問も、堂々とした態度で発表できた。生活グループで話し合うことによって、追究の方向性が明確になるとともに、ほかの子供が出した気付きや疑問を共有化でき、学習問題をつかんでいくことができたと考える。

【伊勢崎市立豊受小学校】(生活グループは、4人×6グループと3人×2グループ)

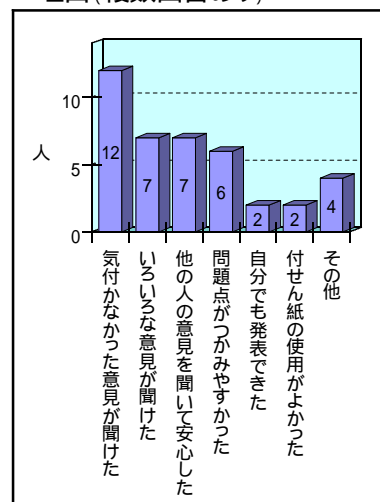
Cさんは、不思議に思ったことや驚いたことなどに「なぜ」「どのように」などの疑問を表す言葉を付けて学習問題を作るという話に真剣に耳を傾けていた。そして、コンテナについての気付きに「なぜ」「どのように」などの疑問を表す言葉を付けて文にし、重さや大きさ、船に積める量、中身と色との関係など七つの疑問を付せん紙に書いた。生活グループの中で発表する場面では、付せん紙に書いた自分の考えを発表することができた。Cさんのグループでは、ほかの3人もコンテナに関する気付きが多く、付せん紙を動かして似ているものをまとめることができた。「コンテナはどこから来たのか」「一番多く来る国はどこか」という解決すべき貿易の問題に直接かかわる疑問も出され、Cさんもほかの子供も興味を示したが、グループの考えとしてみんなで確認したりワークシートにまとめたりするところまではいかなかった。話合いはうまく進まなかったものの、友達のことを知ったことに対する満足感が高く、事後調査でも発表し合ったり話し合ったりしたことが学習問題をつかむのに役に立ったと答えている。

Dさんは、まず「港にとまっている船は、どこへ行くのか」という疑問を、次に「コンテナが港にたくさんある」という気付きを付せん紙に書いた。港に泊まっている船は自動車専用船であり、この船がどこかへ自動車を運搬するはずだという考えから「どこへ行くのか」という

疑問を表す言葉を付けて文にすることができたものとする。そしてDさんもグループ内の発表で、付せん紙に書いた自分の考えを発表することができた。話し合いでは4人も、積極的に発言することができず、Dさんの「どこへ行くのか」やほかの子供から出された「どこからきたのか」、「コンテナの中には何があるのか」といった解決すべき貿易の問題に直接かかわる疑問を、グループの考えとしてまとめるところまではいかなかった。しかし、ほかの子供の考えが自分と同じで安心したり自分と違う考えに感心したりしたことから、事後調査では発表し合ったり話し合ったりしたことが、学習問題をつかむのに役に立ったと答えている。

全体的に見ると、日ごろ話し合いを苦手と感じている子供も、付せん紙に書いた自分の考えを読むことによって一人一人が自分の考えを伝えることができていた。また、資料1のように付せん紙を動かして同じ考えをまとめることで、追究すべき問題を把握することができていた。事後調査でも欠席した1名を除いた39名中38名の子供が、付せん紙を使用したことは話し合いに役に立ったと答えている。したがって、付せん紙に自分の考えを書き、それを基に発表するという方法が話し合いを成立させる上で有効に働いたことは確かであった。また、話し合いの有効性についても37名の子供が、問題を把握するのに話し合いが役に立ったと答えている。その理由として、多様な意見を聞くことによって、新しい発見をしたり自分の考えに自信をもったりしたことがよかったと考えており、考えていることを互いに聞き合うことだけでも価値があったといえる(資料2)。

資料2 話し合いが役に立った理由(複数回答あり)



これらのことから、つかむ過程において一人一人の気付きや疑問を出し合い、問題解決の必要性などについて話し合っって問題を焦点化していく活動を取り入れたことは、追究すべき問題を把握し、解決の見通しをもつのに有効であったと考える。

2 調べる過程において、輸出や輸入に関する問題を解決する方法について話し合ったり、調べて分かった事実を教え合ったりする活動を取り入れたことは、自分が追究していた「輸出」あるいは「輸入」について、事実を正確に把握するのに有効であったか

第3時と第4時は、輸出あるいは輸入について調べるために、調査グループに分かれて調査と結果のまとめを行った。第3時は、各調査グループの共通問題(輸出あるいは輸入)を解決するためにどんなことを調べていけばよいのかを明確にするために子供たちが交流し合う活動を行った。まず各調査グループで話し合っって、子供たちから第1時に出された学習問題を基に作成した学習問題一覧表の中から、大切だと思われる学習問題を幾つか選択した。次に、それらと同じ共通問題を追究するグループ同士で発表し合い、調査の方向性について再び各調査グループで話し合っって、一人一人が追究する学習問題を決定した。第4時は、一人一人が調べて分かった事実を各調査グループの中で共有化するために、子供たちが交流し合う活動を行った。調べた結果をまとめ直した発表用資料を基に、グループ内で調べて分かった事実を教え合い、グループの共通問題についてどんなことが明らかになったのかを確認しながら、次時に使う発表用資料を協力して作成した。

【六合村立第一小学校】(調査グループは、輸出: 3人×2グループ、輸入: 2人×2グループ抽出児は、二人とも輸出グループに所属)

Aさんは、学習問題を選択する場面で、自分が調べたいものを三つ選んで最初に発表した。しかし、一人三つずつ選んだのでは多すぎるという指摘を受け、話し合いの中で考えを変えなが

ら、最終的に「グループで四つの問題を選ぼう。」という提案をすることができた。選択した学習問題を発表し合う場面では、ほかの調査グループの子供から内容に重複があることを指摘され、学習問題を三つに整理し直した。これらのことから、学習問題を選択する場面での交流によって、自分の思いを優先させず、グループの共通問題を解決していくという方向から学習問題を絞っていくことができたと考える。調査の場面では、「どこへ輸出しているのか」という学習問題を担当し、分かったこととして「どれもアメリカへの輸出が多い(特に機械)」と記述している。分かった事実を調査グループの中で教え合う場面では、自動車や自動車部品もアメリカに多く輸出されていることを知り、「全体的にアメリカへの輸出が多い」「自動車部品の輸出が多い」「アメリカでは、日本が輸出した自動車部品を使って自動車をつくっているのでは」とワークシートに記述している。これらの記述から、ほかの子供の発表を聞いて分かった事実を自分の調査結果と比べながら正確に把握し、それらを関連付けて考察することができたと考える。

Bさんは、最初から「どのくらい輸出しているのか」について調べたいという思いを強くもっていた。話合いの結果、グループで追究する学習問題の一つとして取り上げることになり、自分が選択した学習問題に価値があることを確認できた。調査の場面ではその学習問題を担当し、分かったこととして「自動車の部品より自動車の方が多い(コンテナ貨物)」「自動車の部品と自動車の輸出先はアメリカ合衆国が一番多い」と記述している。分かった事実を調査グループの中で教え合う場面では、ほかの子供の作った資料から自分の読み取りの間違い(コンテナによる輸出は自動車より自動車部品の方が多い)に気付き、訂正することができた。また、ほかの品目もアメリカへの輸出が多いことを知り、分かったこととして「アメリカへの輸出が多い」「自動車の部品が多く輸出されている」と記述している。これらの記述から、ほかの子供の発表を聞いて分かった事実を自分の調査結果と関連させながら考え、輸出の事実について正確に把握することができたと考える。

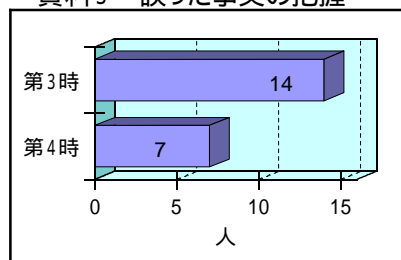
【伊勢崎市立豊受小学校】(調査グループは、輸出:4人×3グループ、3人×1グループ、輸入:4人×3グループ、3人×1グループ 抽出児は、Cさんが輸入グループ、Dさんが輸出グループに所属)

Cさんは、学習問題を選択する話合いで積極的な発言は見られなかったが、自分が調べたいことをしっかりと伝えていた。Cさんは、「輸入しているものの金額はどのくらいなのか」という学習問題を選択し、教科書の資料から「輸入の総額」と「輸入しているものの総額に占める割合」について読み取ることができ、機械類の輸入が一番多いことや原料品の総額に占める割合がそれほど高くないことに気付いた。しかし原料品の総額に占める割合がそれほど高くないことから、「日本は原料品について余り外国には頼っていないのではないか」という誤った考えをもってしまった。しかし、第4時の教え合いで、「どのくらいの量を輸入しているのか」という学習問題を調べ、日本は燃料や原料をかなりの量輸入しているという発表をした子供がいたことから、原料品の輸入は、総額に占める割合では少なくとも大部分を海外に依存しているという事実をつかみ、考えを訂正することができた。

Dさんは、学習問題を選択する話合いで、自己評価でも認めているように遠慮をしまい、自分の考えを積極的に出すことができなかった。Dさんの調査グループでは、欠席者がいたため3人で話し合った。全体での発表後、「輸出はどのように行われているのか」という共通問題を解決するためには、どの学習問題も大切であるということから、一人が二つずつ学習問題を選択し調べることにした。学習問題を選択する話合いでは活発に発言をすることができなかったが、教え合う活動である調査グループの発表では、自分が調べた確かな資料を基に機械がたくさん輸出されていることについて発表することができた。また、ほかの子供からは輸出している量や金額、多く輸出している国の発表などがあり、輸出の全体像について理解を深める

ことができた。授業後のふり返りでも、自分の考えを書くのにほかの子供の考えが役に立ったと答えている。その理由として「 さんの考えたことがすごいなあと思ったから」と記述しており、調べて分かった事実を教え合ったことに対する満足感が見られた。

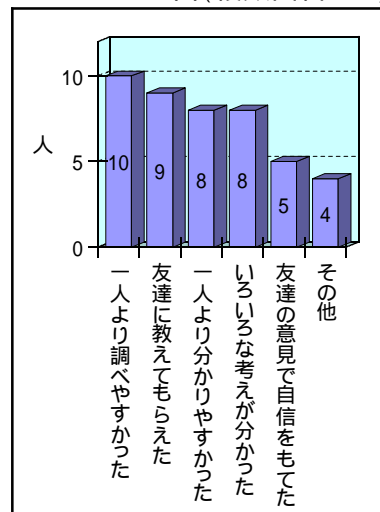
資料3 誤った事実の把握



全体的に見ると、各調査グループが選択した学習問題を発表する場面で、「一緒に解決できそうな学習問題は、まとめて解決する」というアイデアが出されると、早速それを取り入れるグループが出てくるといったように、よい考えは進んで取り入れようとする姿勢が見られた。教え合う活動では、自分で調べたことの間違いに気が付いた子供も見られた。ある子供は個人で調べている段階で、資料の読み取りを間違えたために事実を誤ってとらえていた(資料3)。その後、調べて分かった事実を教え合う活動で、読み

取ったことが間違いであることを指摘された。しかしその結果、間違えたままで終わらず正しく理解できたことで、教え合う活動のよさを実感していた。個人で調べる活動を設定しても、資料を読み取る力の不十分さからどうしても事実を誤ってとらえてしまうことがある。しかし、今回のように個人で調べた後に、子供たちが調べて分かったことや考えたことを教え合う活動を取り入れれば、事実を誤ってとらえてしまうことを減らし、子供たちが事実を正確に把握することができるようになると思う。話し合いや教え合いの有効性について、子供たちはそのよさを感じ、事後調査では40名中39名の子供が、共通問題の解決のために役に立ったと答えている(資料4)。

資料4 話し合い、教え合いが役に立った理由(複数回答あり)



これらのことから、調べる過程において問題を解決する方法について話し合ったり、調べて分かった事実を教え合ったりする活動を取り入れたことは、社会的事象の事実を正確に把握するのに有効であったと考える。

3 深める過程において、「輸出」あるいは「輸入」について調べて分かった事実やそこから考えたことを教え合う活動を取り入れたことは、分かった事実を比較・関連・総合させて、工業生産を支える貿易について自分なりの意味付けをするのに有効であったか

第5時は、各調査グループで調べて分かった事実を教え合い、貿易について自分なりの意味付けを行うために子供たちが交流し合う活動を行った。まず、各調査グループのメンバーが入り交じった発表グループに組み替え、発表用資料を基に調査結果を教え合った。そして、分かった事実を基に「共通点や相違点を見つける」「つながりを考える」「合わせて考える」などの観点から考えることによって、貿易に対して自分なりの意味付けを行った。

【六合村立第一小学校】(発表グループは、5人×2グループ)

Aさんは、ほかの調査グループの発表内容を資料で確認しながら正確にメモをとっていた。分かったこと・考えたこととして、「輸出と輸入、どちらもアメリカとかかわりがある」「自動車部品の輸出が多い」「鉄鉱石は日本ではとれないので、100%輸入している」「鉄鉱石がなければ車も車の部品も作れない」「日本でつくっていない、とれない物を輸入している」と記述している。これらのことから、調査結果を教え合う活動を通して自分が調べなかった輸入に関する事実がつかめるとともに、それを基に輸出と輸入の共通点や関連を考えながら、貿易全

体の様子や工業生産とのかかわりをとらえることができたと考える。

Bさんも、発表の要点を正確に書き留めることができた。分かったこと・考えたこととして、すぐに「日本はアメリカにたくさん輸出しているし、アメリカのものをたくさん輸入している」と書き、そのほかにはないかしばらく考えていた。結局書けたのは一つだけだったが、指名されて発表したときには、大きな声ではっきり発表できた。これらのことから、教え合う活動を通して分かったこと（相手国、品目、金額など）を基に輸入と輸出を関連させて考え、自分なりに意味付けたことを自信をもって記述できたと考える。

【伊勢崎市立豊受小学校】（発表グループは、4人×6グループ、3人×2グループ）

Cさんは、これまでに輸入について調べ、自分で直接調べてつかった「機械類の輸入が多い」という事実を初めとして、「多くの国から輸入をしていること」「原料や燃料も大量に輸入をしていること」などをつかんできていた。また、前時の調査グループ内の教え合いでは、パーソナルコンピュータが輸入されていることを初めて知り驚きを感じていた。発表グループでの教え合いでは、輸出を担当した二人から機械の輸出が大変多いことを中心に発表が行われた。また、輸入を担当した子供から原油や石炭などを大変多く輸入しているという発表があった。その結果、貿易がどのように工業生産を支えているかということについて「日本は機械を主に輸出している、機械の輸出は毎年増えている」という事実をワークシートに記述することができた。そして、それと関連して、「日本が輸入しているものは燃料」であると記述した。教え合う活動でつかった事実を関連付けて考えることによって、工業生産を支える貿易の姿について自分なりの意味付けができたものとする。

Dさんは、これまでに輸出について調べ、「日本は機械を多く輸出している」という事実をつかみ、「外国では機械は余り作られていないのでは」という予想を立てていた。ところが、発表グループでの教え合いで、輸入について調べた二人から「輸入しているものの割合では機械類が一番多い」という発表があり、自分の予想が違っていたことに気が付いた。また、輸出・輸入ともアメリカが大きな貿易相手国であることも理解し、ワークシートに「輸出も輸入もアメリカと多くやっている、日本が輸出しているもの輸入しているものも機械が多い」と記述することができた（資料5）。授業後の振り返りでも、自分の考えを書くのにほかの子供の考えがとても役に立ったと答えている。その理由として「友達の考えや意見がすごいと思ったから」と記述しており、見通し2での姿と同様に調べて分かった事実を教え合ったことに対する満足感が見られた。

全体的に見ると、子供たちは、教え合う活動によって輸出や輸入について新しいことが分か

ったり、同じ考えがあって安心したりすることができたといえる。そして、分かった事実や考えを比較・関連・総合させるとどんなことが分かるかについて、子供たちがワークシートに記述したのを見ると、40名中38名の子供に輸出と輸入にかかわる記述があった。これは、子供たちが輸出と輸入に関する事実をある程度正確に把握し、自分なりの意味付けをすることがで

資料5 Dさんのワークシート

調べたことを発表しよう 番 名前 No.5

1. 友だちの発表を聞いて、共通問題を解決する上で重要だと思う言葉や考えなどをメモしてみよう。

日本が輸出しているものについて 全体的に機械類の輸出が多い。

その他の輸出に関することについて 最近では、機械の輸出のわりあい大幅にふよきています。

輸出について!

日本が輸出している国について アメリカ、ヨーロッパ、大か人民 国、台湾、東南アジアなど。

日本が輸入している国について 中国、イタリヤ(洋服) 自動車は台湾、パソコンは、中国、アメリカ合衆国 石油は、サウジアラビア

その他の輸入に関することについて 日本は、たくさん外国から 輸入している。

日本が輸入しているものについて 機械、燃料、せんい、 食料品など。

輸入について!

2. 四つのグループ(または三つのグループ)の発表を合わせると、どんなことがわかりますか? 貿易がどのように工業生産を支えているかについて考えてみましょう。

工業生産

?

貿易

輸出も輸入も、アメリカに多い。

日本が輸出しているもの、輸入しているものも、機械が多い。

きたためと思われる。さらに、そのうちの23名には工業生産と貿易とを関連付けた記述が見られた。ここでは、各調査グループで調べて分かった事実を教え合っているので、子供たちは多くの新しい情報を得たことになる。しかし、それだけではなく、友達によく教えてもらえたことやいろいろな意見を聞くことができたことで、教え合いのよさを感じた子供も多くいた(資料6)。教え合いの有効性について、事後調査では、全員が自分なりの意味付けをするのに役に立ったと答えている。ワークシートの記述には「友達の発表をヒントにして、自分の考えをもつことができた」「いろいろな発表を聞いて貿易がどのように工業生産をささえているのかが分かった」といった感想も見られた。

これらのことから、深める過程で、分かった事実やそこから考えたことを教え合う活動を取り入れたことは、分かった事実を比較、関連、総合させて、社会的事象に対する自分なりの意味付けをするのに有効であったと考える。

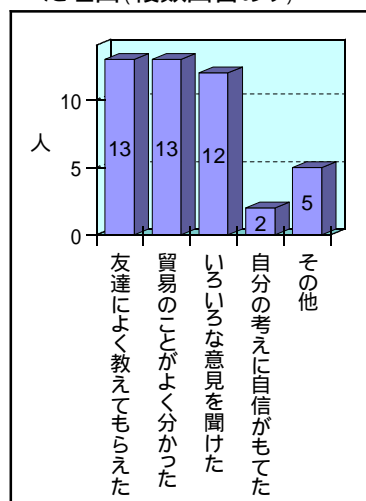
4 広げる過程において、つりあいのとれた貿易にするための方法を検討するために小グループで話し合い、その結果について全体で意見を交換し合う活動を取り入れたことは、貿易のもつ多面性に気付き、これからの貿易と運輸の姿について、自分の生活と関連付けたり、貿易相手国の立場に立ったりして、より広い視野から考えるのに有効であったか

第7時は、貿易に対する見方や考え方をさらに広げるために子供たちが交流し合う活動を行った。まず、前時に一人一人が考えた、つりあいのとれた貿易にするための方法を集約したものについて、3人編成の小グループで話し合って実現の可能性、有効性、生活への影響などの観点から検討し、最良の方法を選んだ。次に、各小グループで選んだ方法とその理由を発表して全体で意見を交換し合い、貿易についてより広い視野から考えた。

【六合村立第一小学校】(話し合いのグループは、3人×3グループ 第一小では資料7のように解決方法が集約された)

Aさんは、前時に三つの解決方法を考えた()の順)。3人による話し合いでは、前時に考えた の方法の問題点に気付いたり、「 と を合わせるといいんじゃないか。」「食料は本当に足りてるのかな。」などの意見や疑問を出したりして、話し合いを中心になって進めていた。 や の方法を支持していたが、ほかの二人の同意が得られず、しばらくの間 が一番上位にランクされていた。Aさんの「そうだ、全部でなくて一部を減らせばいいんだ。」という発言にほかの二人も同意し、グループとして最終的に の方法を選択した。全体で意見を交換し合う場面では発表者となったのだが、輸出を減らすことに対し、ほかのグループから「収入が減りリストラが多くなる。」などの問題点が相次いで出された。話し合いを通して気付いたこととして「輸出をへらすと、よい事よりも問題点の方が多くなる。貿易はとても難しい」、これからの貿易と運輸で大切なこととして「輸出をあまり減らさない。減らすと大変な事が起きる。売りすぎない」と記述している。これらのことから、3人で話し合ったり全体で意見を交換し合ったりする活動を通して、貿易のもつ多面性に気付き、自分の考えを修正しながら貿易についてより広い視野から考えられるようになってきたと考える。

資料6 教え合いが役に立った理由(複数回答あり)



資料7 貿易問題の解決策 (六合村立第一小学校)

輸出した分だけ輸入する
輸出を減らす
いったん輸出を中止する
輸入を増やす
日本のせいで売れなくなったものを日本が買う
輸出する金額を決める
アメリカと日本が手を組む

Bさんは、前時に の解決方法を考えた。3人による話し合いでは、最初に を指して「これを一番下にする。」と言い、 についても否定的なコメントをした。自分の考えを述べた後ほかの子供にも意見を求め、 の方法を支持する意見が出されると、それに同意する発言をした。その後、「 はいいことあるの。」などの意見を出しながら、進んで話し合いに参加していた。グループとして最終的に の方法を選択した。話し合いの結果を記入するワークシートを書く役を引き受け、空白だった問題点を書く欄に、「むだが増える」という問題点を見つけて記入することもできた。全体で意見を交換し合う場面では発表者となり、大きくはっきりした声で発表できた。話し合いを通して気付いたこととして「輸出した分だけ輸入すると、いらぬ物も入ってきてお金のむだになる」、これからの貿易と運輸で大切なこととして「自分の国のことだけじゃなく、相手の国のことも考える」と記述した。これらのことから、話し合いを通して貿易を自分の生活と関連付けて考えたり、相手国の立場に立った貿易を行っていくことの重要性に気付いたりすることができたと思う。

【伊勢崎市立豊受小学校】(習熟度別の二つのコースに分かれて学習した。話し合いのグループは、それぞれ3人×5グループ Cさん、Dさんとも同じコースに所属)

Cさんは、貿易相手国が日本からの輸入に頼らなくてもすむようにした方がよいという考えから、前時に「日本が輸出を減らす」という方法を考えていた。3人による話し合いではほかの考えも出されたが、最終的にはグループの考えとして、Cさんの「日本が輸出を減らす」というものとはほかの二人の考えも取り入れた「貿易相手国とよく協力する」というものを選択した(資料8)。しかし、全体で意見を交換し合う場面では、自分の考えとは逆で日本の方が日本製品を輸入してくれる貿易相手国を頼りにしているという考えが

資料8 Cさんのグループが選択した解決方法

これで貿易まさは解決できる!! ()グループメンバー

【O効果がありそう。 O実現できそう。 O方法がはっきりしている。 Oほかの方法と比べてよい点が多い。など】

<input type="checkbox"/> 日本が、先よりも輸出をへらす。 (輸出をへらして、輸入とつりあいをとる。)	<input type="checkbox"/> 日本が、輸出をへらして、もっと輸入をへらす。 (輸出をへらして、輸入はふやしてつりあいをとる。)	<input type="checkbox"/> 日本は、アメリカ以外の国にもっと輸出をへらす。 (輸出をへらして、輸入はふやしてつりあいをとる。)	<input type="checkbox"/> 日本は、相手の国にないものや定額のものだけを輸出するようにする。 (輸出をへらして、輸入はふやしてつりあいをとる。)	<input type="checkbox"/> 貿易をする相手の国とよく協力をする。
<input type="checkbox"/> アメリカなどの、日本の貿易相手国に、貿易をしてもらう。 (輸入をへらす。輸出をふやす。日本は外から輸入する等。)	<input type="checkbox"/> 日本が、もっと輸入をふやす。 (輸入をふやして、輸出とつりあいをとる。)	<input type="checkbox"/> アメリカなどの外国に工場をつくり、そこで生産する。		

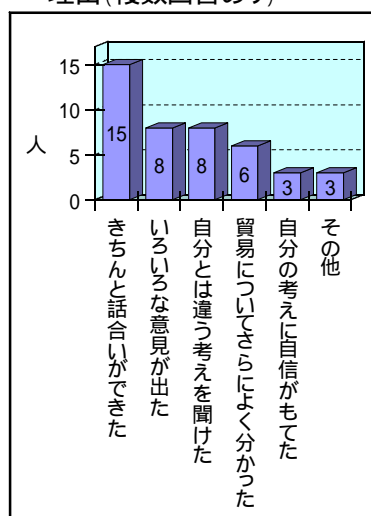
【Oあまり効果がなさそう。 O実現が難しそう。 Oどうするのがよくわからない。 Oほかの方法と比べて問題点が多い。など】

出されたり、日本からの輸出を減らしたときの問題点や「アメリカなどの外国に工場を造りそこで生産する」という方法が既に実施されていることを知ったりした。その結果、最後に書いたワークシートでは、日本が輸出を減らすという考えには問題があり、「外国が日本のものを輸入してくれないと日本が困ってしまう」という記述も見られた。貿易相手国が一方向的に日本に頼っていると考えていたものが、日本の方も頼りにしていたという事実気がついたわけで、貿易に対して多面的な見方ができるようになったといえる。

Dさんは、日本がアメリカにばかり頼って輸出しているという考えから、前時に「アメリカ以外の国にもっと輸出するようにする」という方法を考えていた。Dさんのグループでは、一人は同じように日本がアメリカに頼っていると考え、「輸出を減らす」のがよいと考えていた。しかし、話し合いでもう一人が考えた「輸出を少し減らす。または輸出を少し減らして輸入も少し増やしてうまくつり合いを取る」という方法が、日本の産業を衰えさせないために重要であるということに気付くことができた。その結果グループとしては、「輸出を減らして輸入を増やす」という方法を選択した。また、全体で意見を交換し合う場面では、自分の考えとは逆であるCさんの考えを知ることができた。そして、日本が一方向的にアメリカを頼っているという考えからアメリカも日本に頼っていることに気付くことができた。さらに、これからの貿易と運輸で大切なことについてワークシートには、「貿易相手国と仲良く協力し合うことが大切だ

と思った」という記述が見られ、考えの広がりがあったといえる。

資料9 話し合いが役に立った理由(複数回答あり)

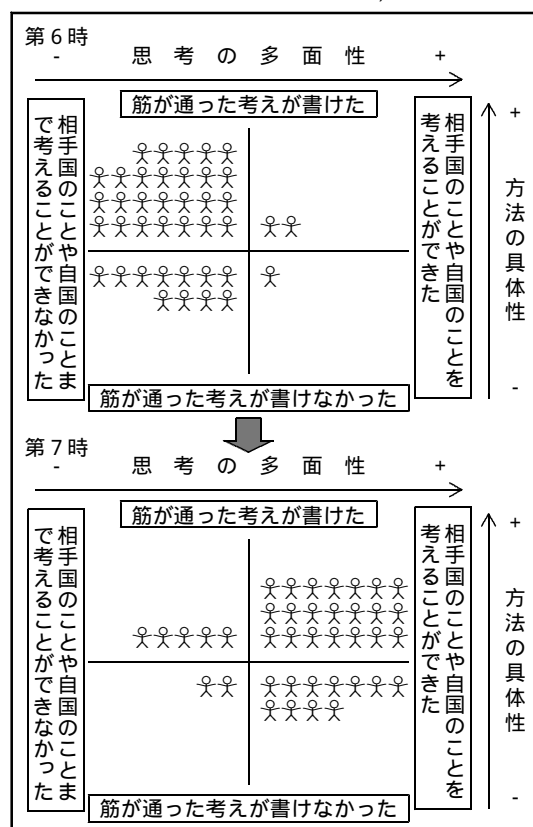


全体的に見ると、解決の方法について3人編成の小グループで話し合ったことによって、子供たちが積極的に発言する姿が多く見られた。子供たちは、これまでの学習で話し合いに慣れてきており、解決の方法について自分の考えを積極的に発表していた。この話し合いでは、付せん紙を動かすという活動を取り入れたが、この活動も話し合いを進める上で有効であったと考えられる。小グループで解決の方法について話し合った結果、前時に個人で考えた解決方法とは違った方法に変更した子供が前時と本時に欠席した2名を除く38名中34名いた。子供たちは、前時に個人で解決の方法を考えたときには、実際にその方法を取り入れたときの有効性だけに目を向けがちで、問題点については余り考えることができなかった。しかし3人で話し合う中で、それぞれの意見を取り入れたり問題点について考えたりし、実際にその方法を取り入れたときの問題点にも目を向けることができるようになったためと思われる。事後調査では欠席した1名を除く39名中38名の子供

が話し合う活動の有効性を認め、新たな問題について解決する方法について話し合ったことは、貿易についての考えを深めるのに役に立ったと答えている。その理由としては、全体の3分の1以上の子供が話し合いがきちんとできたことを挙げている(資料9)。これは、子供たちがこれまでの学習で話し合いに慣れてきたこともあるが、3人という少人数でのグルーピングが話し合いを成立させる上で有効だったことも影響しているものと考えられる。子供たちはその後各グループで話し合った結果について全体で意見を交換し合うことによって、さらに多様な考えに気づき貿易の問題が抱える複雑さを理解することができた。また、これからの貿易と運輸について大切なこととして、子供たちが学習の最後に自分の考えを書いたものを見ると、前時に解決策を考えたときとは違って、相手の国のことを考えることやお互いに協力し合うことなどが必要だという記述が多く見られるようになった(資料10)。話し合いや意見交換では、これからの貿易と運輸について自分の生活と関連付けて考える姿が多く見られた。子供たちは、新たな問題について解決策を話し合ったことによって、貿易について今までよりも広い視野から考えることができるようになったといえる。

これらのことから、広げる過程で、新たな問題について話し合ったり、これからの貿易と運輸の姿について考えたりする活動を取り入れたことは、子供たちの見方や考え方を広げるのに有効であったと考える。

資料10 子供たちの思考の変化(○は一人一人の子供を表す)



研究のまとめと今後の課題

研究の結果、次のようなことが明らかになった。

子供たちを取り巻く環境の違いにかかわらず、問題解決的な学習の各過程に、子供たちが交流し合う活動を取り入れたことによって、子供たちは多様な見方や考え方にふれ、それらを基に自分の考えを確かめたり修正したりしながら、広い視野に立って社会的事象の意味について考えることができた。

話し合いを成立させるためには、子供が自分の考えをもって話し合いに臨むこととともに、お互いの考えを受け入れるという姿勢も必要になってくる。そのためには、学習の中に話し合う活動を積極的に取り入れ、話し合いに慣れるようにしたり、話し合いをする前に自分の考えをまとめる時間や場を保障したりすることが大切である。また、話し合う観点の与え方やグループ編成などを工夫することも必要である。

深める過程と広げる過程で取り入れた習熟度別の少人数指導では、落ち着いた雰囲気の中で子供たちが積極的に自分の考えを発表することができた。グループの話し合いでは、3人編成にしたことが大変有効であった。3人編成ではグループ数が多くなり、全体での発表やまとめに時間がかかってしまうために一斉指導ではあまり取り入れることができないが、少人数指導を導入することによってそれが可能となった。

<参考文献>

- ・北 俊夫 著 『社会科の責任』 東洋館出版社（2000）